

かう一群の群集から自警集団の場所で起きている事件現場へと右方向へ向かう人々まで)。この範囲に登場する人々の数は、鳶口・日本刀・棍棒などの武器に相当するものを持った人83人、自警団の高張り提灯をもった人4人の計87人、後ろ手を縛られた10人と今まさに手を縛られて連行される3人の計13人、それにサーベルを着けた白い夏服の警官1人である。土気で描かれた時期のものに比べ、震災の年に描かれた第3巻では圧倒的に描かれる群衆の数が少なく、また、負傷者や死者を思わせる倒れている人も描かれていない。チマチョゴリも登場しない。それに背景は夜を思わせる闇として描かれてはいないのである（図5参照）。

したがって、震災の年のものと、それから3ヶ月を経て描かれたものとの違いが示すものは、この事件現場の記憶が薄れるのではなく、却って多くの新しい事態が描き込まれたわけであり、その意味は小さくはないだろう。そこに作者白洞が震災絵巻のこの場面を書き換えたいと思うに至る抑えがたい感情の動きがあるように感じられる。

しかしながら、次に検討する(3)の東京都慰霊堂保管の「東都大震災過眼録」第3巻にはこの自警団による朝鮮人捕縛の場面は描かれていない。

1-4. 東京都慰霊堂保管「東都大震災過眼録」第3巻

この巻の末尾に「東都大震災過眼録 巻三 六合醸士黄丘山人写 於吾妻台下 郷天真草舎」に銘記されているところから、この絵巻は黄丘と号するようになってから作成されたものであるとすれば、制作時期は結婚後の1929年以降ということになる。吾妻台下とはどこに居住していた時のものか現在のところ不明である。六合醸士とは六合の酒を好んで飲むという程度の意味であろうから、酒好きの白洞ならではの名乗りではないだろうか。1929年以降ということになれば、震災復興祭が1930年に行われ、震災記念堂の完成が1931年であったから、震災記念堂に寄贈する目的で作成されたと解すれば時期的には符号する。

さて、混乱から鎮静化へ向かう段階の絵巻として特徴的な点はどうであろうか。

まず、(1)の全3巻の最後の巻、および(2)の個人蔵の絵巻と同様、聖観音が描かれて、ひとまず震災の混乱が沈静化したことを予測させる。

最初の群像として描かれるのは「尋ね人 ○○○」と書いた板切れなどを掲げて歩く一群と出会え

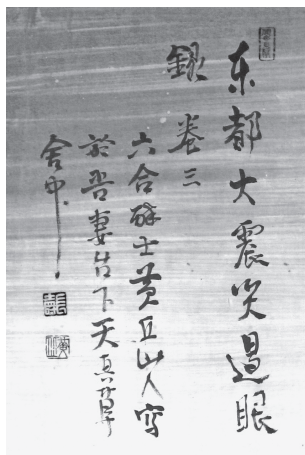


図6 「東都大震災過眼録」第3巻（署名部分）

て喜び合う人々の姿である。当時の記録などからはこうして人探しをした経験がかなり一般的であった。「△△立退所」を掲げるバラックも見られる。飯炊きのコンロが据えられ、牛めし、すし、うどん、そばなどのいわばファーストフードの仮店もできて、バラック生活もかなり慣れてきた様子である。風呂敷を斜交いに背負い買出しに出かける男女の姿も描かれる。散髪には格安10銭の看板を掲げる床屋も商売をはじめた。一方配給所には米俵が山と積まれ、竈に握飯の飯炊きをする人も居る。ここでは番傘に尋ね人の名前を書いて人探しをする人も描かれる。この年は西瓜も梨も豊作であったというが、水の代わりに西瓜が良く売れた模様である。ウィスキーやぶどう酒を売る店も登場する。炊き上がった米は女たちの所へ運ばれて握飯が作られる。もはや、第2巻に描か

れたような食料の争奪戦もなく、穏やかに落ち着いて握飯を受け取る人々の様子が描かれる。他の巻に登場する復興小学校の野外授業の光景はここでは省略されている。そして、「南妙法蓮華經」あるいは「南無阿弥陀仏」の幡を掲げて、法要が営まれる被服廠跡へ急ぐ人が三々五々描かれ、山と積まれた遺骨の場面で終わる。被服廠跡地は3万8千あるいは4万人といわれる人がここで焼死したが、他のところで亡くなった人々の遺骸も持ち込まれ、約1週間を掛けて焼かれた場所である。ほとんどの人々は名前もわからないままに焼かれた。現在、その結果、慰霊堂納骨堂には震災で亡くなった5万7千体の遺骨が納められることになったのである。

それはさておき、ここにはひたすら穏やかな生活を取り戻しつつある人々の様子が描かれる。震災後1、2ヶ月の間にそうした事態が実際に実現したとはいえないが、この頃には内務省や東京市などが建てる公設バラックがほぼ整えられた段階である。しかし、そうした光景を作者は描こうとはしていない。あくまでも罹災者が作り出す自前の生活に終始した。そのことは、これら一群の絵巻に一貫して流れている。また、自警団一朝鮮人を描く細部の書き換えが行われていることなど、震災直後、実地見聞をした白洞が眼にした光景への強いこだわりが感じられるのである。

では、最後に、画帖仕立ての「東都大震災過眼録」をみておくことにしよう。

1-5. 国立歴史民俗博物館蔵（歴博）「東都大震災過眼録」1帖

2000年に古本市場に出たものを購入したとされる1品である。これは卷子仕立てではなくこれまで見てきた(1)の全3巻、(2)の1巻から話題となる場面を集めた22点から構成されている。最初の1枚は(1)で第2巻の頭に登場した三面六臂の怒れる明王像である。地震で崩壊する家屋、火災旋風に襲われる人々、馬、必死の思いで逃げ延びようとする人、倒壊する橋、橋が落ちて川に流される死体、なおも襲う火災旋風から子供を抱きかかえ、倒れる人を救いつつ逃れようとする人々、やがて軍隊によって怪我人が救出され、戒厳司令部の出張するテントが張られて、鎮静化が図られた。軍隊が警護するなかでの炊出し、多くの人々が殺到する食料配給などの混乱状態が描かれる。水も配給される。自警団の詰所辺りでは誰何されて怪しまれた人々が鳶口や日本刀を持った人々に殴られ、倒れた12人の人が描かれる。ここには、後ろ手に縛られ鳶口で殴られる母親に縋り付く幼児一人も含まれる。首を槍で突かれている人も描かれるが、サーベルを掲げる白服の警官は止めるわけでもなく、見守る。スイトンやうどんのバラック店も張られ、ついで江東橋小学校の野外授業の光景が描かれる。小学校の授業開始は

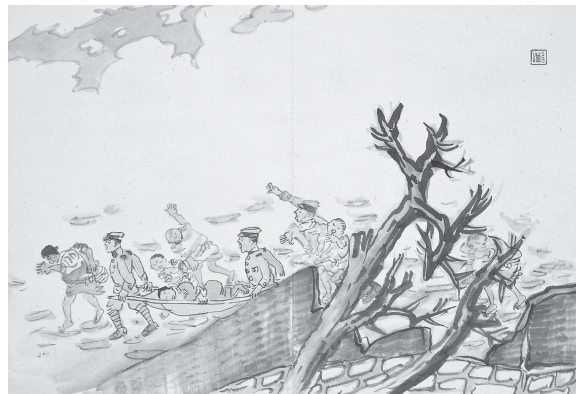


図7 歴博蔵「東都大震災過眼録」画帖（軍隊救出部分）



図8 歴博蔵「東都大震災過眼録」画帖（自警団部分）

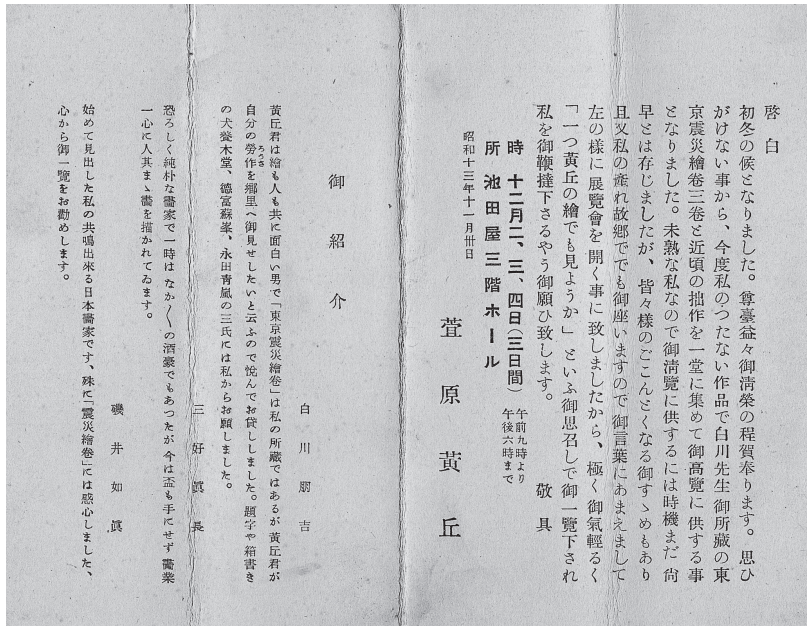


図9 萱原黄丘展覧会案内状

9月25日からであった。震災前に比べ欠けた児童も少なくなかった。散髪をする穏やかな光景、最後に被服廠と思しき供養の場が描かれて終る。

以上の説明により、この巻はこれまで掲げた絵巻のそれぞれから抜書きしたものを画帖仕立てにまとめ、地震発生→火災旋風→人々の避難の苦難→戒厳令下の光景→軍隊に警護されての炊出し→自警団による暴行→バラック生活→

小学校の再開→被服廠での供養のほぼ震災発生から1、2ヶ月頃までの罹災者の一連の流れを描いたものであったことがわかる。

さて、こうした絵画はどのようにして人々の目に触れたのだろうか。

白洞は黄丘と号するようになってすでに10年を過ぎようとしていた1938年（昭和13年）12月2～4日の3日間、高松市の池田屋でその他の近作とともに展示された。その案内状が萱原家に残されている。それによれば、「東京震災繪巻」すなわち「東都大震災過眼録」全3巻は白川朋吉の所蔵となっているが、黄丘のたつての願いで郷里香川の展覧会でこの作品も郷里の人々にみせたいというので貸したと説明され、白川による推薦の言葉のほか、白川から題字、箱書きは当時の著名な政治家犬養毅木堂、徳富蘇峰、永田青嵐（1876-1943、震災時東京市長）に頼んだものとされている。この他、三好眞長、磯井女真の画家2名による賛辞が寄せられた案内状である。白川朋吉（1873～1963）については、前掲石井雍大氏の論文に詳しい。それによれば、同じく香川県の観音寺市出身、弁護士、実業家、大阪弁護士会会長、大阪市会議長、関西大学理事などの要職を勤めた人物で、一方では、大正、昭和の日本画家のコレクターとして1923年大阪市美術協会設立に尽力したという。また、白川は度々の筆禍事件で著名な宮武外骨の弁護を引き受けるなど筋の通った主張を持つ弁護士であったとされる。こうした人物であったから、「東都大震災過眼録」全3巻を白川が所有していたことも不思議ではないと石井氏は推測している。萱原家によれば、白川とは交流も続いたし、また、黄丘のパトロンの一人だったという。阪神大震災をきっかけに市場に出た「東都大震災過眼録」はこのうちの一つではなかったかと石井氏は推定している。

2-1. 「関東大震災画帖」

『関東大震災画帖』（金尾文淵堂発行、大正12年10月25日）について検討する。この画帖については、刊行された印刷本とその原画62点が立命館大学歴史都市防災研究センターに所蔵されている。すでに昨年4月9日～5月9日の間、同センターにおいて、「地図を通して見る関東大震災」展

として、被害地点の写真（絵葉書写真と現在状態）と絵画を地図に落としたものを中心に展示された。

発行所金尾文淵堂は東京市麴町だが、震災で被災したため、印刷は京都新町通り竹屋町南入の便利堂中村弥左衛門で行われ、早くも10月25日には刊行された。

画家は10画伯と表紙には謳われているが、原画の作者の落款あるいは署名は、Reisuke-Niwa（丹羽禮介）、Yoshisuke-Kato（加藤義助）、㊦（赤塚忠一）、㊧（中澤弘光）などが確認できるが、無署名のものも含まれる。ただし、巻末の目次によって、上記画家の他、赤城泰舒、中澤弘光、幡恒春、水島爾保布、清水吉臣、清水吉康の画家が判明する。このうち、もっとも多いのは東京市内を中心に担当した丹羽禮介（白馬会）の35点、被害も大きく地変が多く認められた千葉県の館山などを担当した赤塚忠一の10点、横浜、小田原、箱根、鎌倉などを担当したのは加藤義助の5点、取材途上自警団に殴打されつつスケッチをした幡恒春3点、日比谷公園のバラックなどを描いた赤城泰舒（1889-1995、水彩画家雑誌「みづゑ」編集）2点、表現派そのものと評されるスケッチをなした水島爾保布（1884-1958、画家、小説家、新聞社挿絵画家）、装丁などを担当した中澤弘光（1874-1964、洋画家、白馬会・光風会）、東京、関東の被害地パノラマ図を担当した清水吉臣、清水吉康などの作品で構成された画帖である。

2-2. 描画の内容

各描画については、末尾の表1の一覧に示した。巻頭には9月12日の震災の東京を復興させ帝都とする旨の詔書を掲げた。続く3点は貞明皇后の日赤病院行啓（9月30日）、摂政宮の巡幸（9月15日、18日のうち、描画は15日の銀座付近）、婚約が成立、震災のため結婚式は延期され、震災翌年の1月に行われることになった摂政宮妃の救援活動の様子を描く。これらは公開された写真に基づくものであり、当面除外する。最後に掲載された関東大震災被害地域のパノラマ図5点も、当時出版されたものからの写しであり、画家の創意に基づくものではないので、これら計8点を除くと、描画55点となる。これら55点の描画の大まかな傾向は、倒壊した建物や亀裂の入った道路などをスケッチしたもの27点で全体の半分以上を占め、次いで避難者のさまざまな様子をスケッチしたもの21点は全体の40%近くに当たるから、ほとんどが倒壊建物、避難者に集中しているといえる。他に、被服廠、吉原弁天池などの惨状を描くもの5点、残りは警護、救助活動の兵士・警官の2点となる。倒壊、焼失などの建物などはこれまた、当時絵葉書写真で流布していたものと同工異曲の題材である。もちろん、画家たちの実際の見聞を否定するものではないが、37点の東京に限ると、描かれた題材としては特に目新しいものはない。横浜、鎌倉、小田原も点数はごく少ないが当時写真集などに掲載された著名な場所であり、一般的にはこうした被害状況は知られていた。しかしながら、地盤の隆起による大規模な地変が起きた千葉館山周辺の赤塚忠一の10点のスケッチ、丹羽禮介による中央線余瀨駅の損壊の模様を描く2点などは流布した写真絵葉書などからの写しではなく、実地の見聞に基づくものと考えられる。

この画帖には付録として、絵葉書引き換え券が付いていて、金尾文淵堂宛の大阪出張所宛に葉書を送ると、中澤弘光と丹羽禮介の1組4枚の絵葉書が得られることになっていた。こうした読者サービスについては、絵画の大衆化という点で見過すことはできないので、後述したい。